

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第931号 平成27年5月18日

「頑張り」考

先日、読売新聞社主催による「談論風発の集い」に参加しました。

この集いは、元高校教師で「夜回り先生」として知られる水谷修氏、書評サイト「HONZ」代表の成毛眞氏、そして、女優で作家の中江有里氏の3人が、読売新聞東京本社編集委員の鵜飼哲夫氏をコーディネーターに、活字文化の大切さや読書の楽しさについて語るという内容です。

水谷氏初め3名の方々は、いずれも文筆家であり、読書家でもあるという事で、お話はなかなか聞き応えのある内容でした。

さて、お三方の話が進むうちに、水谷氏が夜回り先生としての経験を話される中で「私は子ども達に頑張りといった事はない。だって、子ども達は皆、それぞれ頑張っていますからね。頑張っている子に頑張りというのは、逆効果です」という趣旨のお話をされました。すると、コーディネーターの鵜飼氏が水谷氏の発言を引き取って「確かにそうですね、頑張りというのは英語では『go for it』といいますからね」と述べました。私は、他のやり取りは霞がかかった状態なのに、この部分だけは妙に頭に残っていますので、今日はこの「頑張り」という一言について考えてみたいと思います。

東日本大震災の際にも、被災者に「頑張り」という言葉は掛けるべきではないという話がありました。被災者は、既に十分に頑張っているのだから、この人たちに「頑張り」という言葉を掛けるのは酷だし、失礼だという事だと思えます。

被災者の様子を見ていたら、彼らが頑張っていないとは誰も思わないし、それ以上に、そんなに頑張らなくてもという思いがつのります。

ただ「頑張り」と声をかける人は、悪意があつての事ではありません。本当に、被災者を応援したいという気持ちからだ、この点も私は疑っていません。

「頑張り」という言葉には、次のように3つのニュアンスがあると思えます。

- 1 全く努力の跡が見られないので、もっと頑張りなさい。
- 2 頑張っている事は分かるが、まだやれるはずだから更に頑張りなさい。
- 3 本当によく頑張っていると思うので、これからも同じように頑張りたい。

「頑張り」と声を掛ける人の気持ちは、殆どが3番目の気持ちなのではないかと思えます。

また、「頑張り」と声を掛けられた人も、大抵は3番目のニュアンスを感じて、

応援してくれていると感じているのではないかと思います。

しかし、中には、自分は目一杯頑張っているのに更に「頑張れ」というのかと、自分が否定されているように感じてしまう人もいます。そういう意味では、言葉遣いには十分気を付けなければなりません。

さて、コーディネーターの鵜飼氏が述べたように、「頑張れ」を英語でいうと「go for it」といいますが、これ以外にも、「hold on」「keep at it」「your best」等幾つかの表現があるようです。

直訳すれば、「go for it」というのは、そこ（貴方のやろうとしている事）に向かって進め、という事になりますし、「hold on」や「keep at it」は、今のまま踏み止まれといった趣旨になります。また、「your best」というのは、最善を尽くせという事ですので、これは日本語の「頑張れ」に近いように思います。

これ以外にも、英語では、「Good Luck（幸運を祈る）」「You can do it（あなたなら出来る）」「Hang in there（諦めるな）」といった具合に、頑張れに相応する表現は豊富です。逆にいうと、こうした英語表現のニュアンスを全部ひっくりめた感じが日本語の「頑張れ」かも知れません。

ところで、「頑張れ」というのは、そもそもどういう意味合いの言葉なのでしょうか。

「頑張れ」の「頑」の字は、「にぶい」「ものの先がまるくて鋭くない」「おろか」「かたくな」といった意味で、「頑固」「頑迷」という言葉が直ぐ浮かびます。もっとも、「頑強」「頑健」「頑丈」という言葉もありますが、これも、筋肉が鉄のように固い感じが出ています。

「頑固」「頑迷」というと時代遅れという感じがしますが、考えようによっては、自分の考えをしっかりと持っていて、何があっても動じないという強さを感じさせます。

それでは「頑張れ」というのは、どういう意味になるのでしょうか。

広辞苑によると、「頑張る」というのは当て字で、「我に張る」が転じたものとあります。「我を張る」というのは、「我意を張る」つまり「何処までも忍耐して努める」という意味になります。とすると、「頑張れ」というのは、「厳しい状況だが何処までも忍耐して自分の意思を貫け」というように解する事が出来るでしょう。これは、英語の「go for it」という表現にぴったりという感じがします。

ただ、日本語の「頑張る」という言葉には、先程も述べたように多様なニュアンスが含まれていますので、この言葉を使う場合には、英語表現を使用する場合と同様に、使う場面や相手を考慮する必要があるという事です。

折角応援の気持ちでいった事も、相手にとっては過剰なプレッシャーになる事もありますし、自分を否定されたと受け取られては何にもなりません。

「頑張れ」の一言ですが、なかなか奥は深いものがあるかと、改めて感じます。

(塾頭：吉田 洋一)